

類型論と通時論を橋渡しすること：
態の通時論の類型論と結合価を
変える諸範疇のための予備の質問票

Leonid Kulikov (Leiden/Moscow)

崔 昌 玉 訳

松 山 大 学
言語文化研究 第33巻第2号（抜刷）
2014年3月

Matsuyama University
Studies in Language and Literature
Vol. 33 No. 2 March 2014

翻 訳

類型論と通時論を橋渡しすること： 態の通時論の類型論と結合価を 変える諸範疇のための予備の質問票*

Leonid Kulikov (Leiden/Moscow)

崔 昌 玉 訳

1. 結合価を変える諸範疇の類型論： 共時論的研究と通時論的研究の不均衡

20 世紀の過去 10 年間は、受動、使役、再帰そして相互のような結合価を変える諸範疇の類型論的研究のかなりの進捗によって示されている。言語類型論はこれらの範疇の構造と機能ぶり (functioning) について我々の理解にかなり貢献してくれている。E. Š. Geniušienėそして V. S. Xrakovskij のようなレニングラード／サンクトペテルブルクの類型論グループの他の構成員だけでなく、V. P. Nedjalkov の調査はこれらの研究の間の極めて素晴らしい位置を占めている。今まで世界の言語において証明された結合価を変える派生の可能な体系の自由に使える豊富な目録がある。更に具体的に言うと、これらの範疇の形態論的、統辞論的、意味論的な共時論的特性についてはかなり知られている。一方、通時論的観点からこれらの範疇を体系的に取り扱うことは欠如している。それらの勃興 (rise)、発展 (development) そして終焉 (decline) は類型論的な調査の

* 私は本稿の草案に関して有意義なコメントをくれた Robert Kerr と Nina Sumbatova にかなり恩恵を受けている。

周辺にほとんどとどまっている。

共時論的類型論と通時論的類型論（それが結合価を変える派生に限定されないが）のそのような不均衡の主な理由のうちの1つは次のようにまとめられる。共時論的言語学者は様々な系統的近縁関係と異なる構造上のタイプを持つ何百もの言語の資料を自由に持っているのに対して、歴史的に志向される類型論的な一般化のための資料はかなり限定されている。形態論的な体系そして統辞論的タイプの本質的な変化をある期間（例えば、1000年あるいはそれ以上）観察するのに十分なテキストの証拠が処理されている相対的に少しの言語がある。これらの言語のほとんどは《ヨーロッパ中心志向の》人間文化の発展の主流に位置づけられる、つまりインド＝ヨーロッパ語族とアジア＝アフリカ語族を重点的に置き、位置づけられた主要な親族グループに属する。避けがたいことではあるが、このような状況がデータの類型論的相違を限定している。

2. 通時論の類型論と文法化の理論

通時論の類型論の幾つかの観点そして問題点に焦点を合わせている言語学の少なくとも1つの支流がある。それは文法化の理論の一般的な表題のもとに成し遂げられる研究を含んでいる。文法化の理論は文法的な形態素の勃興と進化の主要な機構を探求し、発見することを主張する。それ故、通時論的証拠を持ってこななければならないし、その証拠は歴史言語学者によって類型論的な観点のもとで蓄積されている。この枠組みの中でのその調査の結果は〔Heine, Kuteva (2002)〕による“World lexicon of grammaticalization”（それは文法化の理論の文脈の中である研究の有益な例として見做され得る）において便利に要約されている。その題から判断すると、この博学的な本は文法範疇の発展の主な歴史的に証明される経路の目録として確認され得る。しかしながら、この語彙目録をひも解く読者は失望するかもしれない。形態素の進化の十分な証拠が諸語の歴史に焦点を合わせる文法書と辞書、つまり歴史的な文法書と語源的な辞

書から抽出されるだろうと期待する人もいる。しかしながら、かなり驚くべきことであるが、参考文献のリストはたった1つの(!)歴史的な文法書(J. Morris-Jones (Oxford, 1913)による“A Welsh grammar, historical and comparative”)と2つの語源的な辞書(F. Gamillscheg (Heidelberg 1928)による“Etymologisches Wörterbuch der französischen Sprache (フランス語の語源辞典)”と M. L. Wagner (Heidelberg 1962)による“Dizionario etimologico sardo (サルデーニャ語の語源辞典)”)を含んでいる。個々の言語の歴史に関する文献に対する興味が欠如しているというこの状況は、不幸にも文法化の理論の枠組みの中で多くの研究でかなり典型的であるが、読者がこの本で出くわす幾つかのかなりおかしい間違いと欠陥に関与している。本稿では、2つの例に限定する。

相互の形態素の通時論的出处(source)に関心を持つ読者は p. 92 で次の間違った言及を見つかるだろう。それは、《ロシア語の‘drug (comrade/friend: 男性: 単数: 主格)’ + ‘drugá (comrade/friend: 男性: 単数: 対格)’ > 相互標示 (Martin Haspelmath との私信)》である。著者はロシア語の標準語源辞典[Vasmer (1953: 1 章, 373)] を調べることでこの重大なミスを容易に避け、その辞典では、問題の相互代名詞は見出し語‘DRUGOJ ((an)other)’ (古代教会スラブ語, 古典ロシア語‘droug ъ’から)の中で説明されるが, ‘DRUG (friend)’の中で説明されていない。ロシア語 (そして古代教会スラブ語: ‘droug ъ drouga (other: 主格. 単数. 男性 other: 対格. 単数. 男性)’¹⁾ の相互代名詞が幾つかの他の (古代) インド=ヨーロッパ諸語の同様の語源的に関連する単語の繰り返しの表現に並行するのは、まさにインド=ヨーロッパ諸語の比較歴史文法の一般的な知識であり、ギリシア語‘ἀλλήλοϛ’, ラテン語‘alius alium’, ベーダ語 (サンスクリット語) ‘anyó-(a)nyá-(anyáh…anyám, anyā…anyām)’, アヴェ

1) 古代教会スラブ語と古典ロシア語において、代名詞のどちらの部分も女性形において現れ、以下におけるように、先行詞と文法の性において一致するところの例が未だに見出されることに注意せよ。

【例は省略する】

スター語 ‘ańiiō ainīm’, 古典ペルシア語 ‘aniya aniyam’ のように全て ‘(an)other-(an)other’ を意味する²⁾

Heine & Kuteva (2002) の本は世界の諸語の共時論的記述において見受けられ得る文法化の経路の豊富な収集を提示する。しかしながら、かりにその著者が歴史的な文法から入手できる証拠にかなりの注意を払えば、この目録はかなり完璧で、役立つものである。それ故、過去時制の形態素の可能な出処のリストは（それが ‘標的 (target) から出処まで’ という索引を使うことで簡単に編集され得る）、次のものを含む。

- (i) 過去時制に近いもの←奪格【フランス語の例は省略する】
- (ii) 過去時制に近いもの←動詞 ‘come’【マラガシ語の例は省略する】
- (iii) 過去時制←動詞 ‘get’【クメール語の例は省略する】
- (iv) 過去時制←名詞 ‘yesterday’【バカ語の例は省略する】
- (v) 完了相、終結相←動詞 ‘put’【イモンダ語の例は省略する】

先のリストは幾つかのインド=ヨーロッパ諸語の標準の歴史的な文法に基づいて満たされる多くの面倒な欠陥を示す。特に、Heine & Kuteva (2002) に付け加えられる過去時制の2つの重要な出処は以下のものである。

- (vi) 不完了←動詞 ‘become’
- (vii) 不完了←動詞 ‘be’

前者はラテン語の不完了接尾辞 ‘-bā-’ (1人称 ‘-bam’ 等、例えば ‘amabam (I loved).’ を参照せよ) に支障なく再構築されるが、それは印欧祖語の動詞語根 ‘*b^heh₂- (become)’ に立ち戻る (例えば、Leumann 他編 (1977: 579 以降),

2) ギリシア語、ラテン語そしてインド=アーリア語の形式は仮説に基づいた印欧祖語の連語 ‘*alios…aliom (男性), *aliā…aliām (女性)’ を提示する。

Baldi (1976) を見よ)。後者はスラブ語の歴史文法においてよく知られている。
‘-aax ѣ (1 人称)’, ‘-aaše (2 人称)’ 等のスラブ語 (古代教会スラブ語) の標示
は印欧祖語の動詞 ‘*hies-(be)’ の完了形式 ‘*ēse’ に立ち戻る (例えば, Vaillant
(1966: 66 以降) を見よ)。

このリストに, おそらくドイツ語の ‘歯の’ 過去形を付け加える (英語の過
去時制 ‘-(e)d’, ドイツ語の過去形 ‘-t’ 等を参照せよ)。その標示は少なくとも
幾つかのその形式, つまり印欧祖語の動詞語根 ‘*d^heh₁(put, do)’ に立ち戻りそ
うである (英語の ‘do’, ドイツ語の ‘tun’ を参照せよ)。

(viii) 過去←動詞 ‘put’

例えば, (例えば ‘(nasi)dēs (you (save)d)’ における)’ ゴート語の ‘-dē’ <印
欧祖語 ‘*(nosi)-dhēs (文字通り, ‘(save)-put)’ を参照せよ。詳しくは, 特に Ball
(1968), Tops (1974), Kortlandt (1981: 128, 1989) を見よ。

これら 3 つの通路 (path) はラテン語, 古代教会スラブ語, ゴート語等の文
書化した歴史の中で証明されないが, それらに対応するイタリアック諸語, スラ
ブ諸語, ゲルマン諸語のすぐ前に先行し, 言語的現実性 (linguistic reality) を
示す, 祖言語の方言のために再構され得る。

要約すると, Heine & Kuteva による本は, 文法的意味の体系の中の共時論
的に観察することができる変化の役立つ要約であるにも関わらず, 言語類型論
の方法と野望を持つ歴史言語学から役立つ証拠と結びつけることができない。
かなり不幸なことであるが, 同じことが文法化の理論において書かれた多くの
他の研究にも当てはまる。時制, 態そして他の動詞の (そして名詞の) 範疇の
通時論の類型論に関する体系的な調査はいまだに必要なものとして望まれている
状況があるのである。

3. 言語的範疇の通時論の類型論的研究に対する接近法：‘語系譜’

この状況であるにも関わらず、十分に長い期間（約100年以上）テキストにおいてよく文書化されている歴史を持つ諸語（語族）から集積された証拠が、ある通時論の類型論的調査から始めることは的を射ているようである。受動、使役のような、特に結合価を変える範疇の歴史に接近する時、何らかの語族（語系）の系譜を概説するのが役立つだろうし、その系譜が娘諸語（L₁, L₂等々）のその投影よりも前の古代の言語（L₀）の最初に証明されたテキストからその歴史を追跡する。特に興味深いのは、かりに有効であれば、L₀（L', L''等々）の姉妹言語からの証拠であり、それは、図1において示されるように、祖語 *L の研究のもとで範疇の仮説的な歴史と可能な出処の試験的な再構の基礎として役立ち得る。

【図1は省略する】

そのような通時論の類型論的研究のための最もやりがいのある対象はギリシア語、インド＝アーリア語族あるいはヘブライ語のような諸語、あるいは語族を含むが、それらの諸語あるいは語族が何世紀もの間あるいは千年もの間、テキスト（text）において証明されている。それ故、インド＝アーリア語族の場合、三千年以上の間、解釈されてこなかった文書化された歴史が処理されており、古代インド＝アーリア語族（OIA）から出発し、それは（古代）サンスクリット語³⁾とおおよそ一致する。すでにベーダ期間の中盤までに（つまり、紀

3) 最も古代のベーダのテキスト、聖伝は紀元前2000年の後半に書かれている。ベーダは少なくとも2つの主要な期間に分けられ得、それはマントラ語（＝聖伝の讃美歌、マントラと信条を集めたもの、犠牲的な決まり文句と祈りの言葉の収集のマントラの言語）とベーダの散文の言語、それは最も古いウパニシャッド、お経だけでなく、プラーフマナ、アーラニヤカも含むが、である。ベーダテキストの年表について、Witzel (1996: 96以降)を見よ。

元前千年の中盤までに)、サンスクリット語はもはや話される言語ではなかったが、中期のインド=アーリア語族の自国語と共に、聖的な言語として共存した。中期のインド=アーリア語族(MIA)は、紀元前千年の中盤から証明され、パリー語、プラークリット語そしてアーラニヤカを含む(詳しくは、Hinüber (1986)を見よ)。新インド=アーリア語族(NIA)は、それが西暦二千年を含むが、ヒンドゥスターニー語、ベンガル語、マラーティー語、シンハラ語等々のような現代インド語派の諸語によって表現される。

これは、インド=アーリア語族の場合では、結合価を変える範疇の通時論的分析の豊富な資料が処理されていることを意味する。一方では、インド=ヨーロッパ諸語の比較言語学によって収集された豊富な分析は古代インド=アーリア語族において証明される形態論的範疇そして統辞論的範疇の起源そして可能な出処についての仮説のよい基礎を創造し、回想的な通時論の類型論的調査に重要な資料を与える。他方では、新インド=アーリア語族からの証拠だけでなく、後期のベダそして中期のインド=アーリア語族のテキストも将来の通時論的研究を考慮する(どのように古代インド=アーリア語族の範疇が中期のそして新インド=アーリア語族の反映に発展するか)。

結合価を変える範疇、つまり使役の発展に関係する幾つか基本的な傾向に言及しよう。一方では、(ベダの‘-áya-’使役から始まる)インド=アーリア語族の形態論的使役の重要さと生産性は最古のテキストから一定して増加している。古代インド=アーリア語族の最後の時期まで、この範疇はその絶対的な生産性に達し、その生産性が他の使役の機能の衰退と不安定な統辞論的タイプの衰退によって同時に生じている。中期のインド=アーリア語族が二重の使役の勃興を目撃し、幾つかの新インド=アーリア語族において、使役の体系が3つの構成員と同数のものを含む。

他方では、ある生産的な使役の形成は全ての他の競合する使役を追い出す。初期の古代インド=アーリア語族(初期のベダ)では、接尾辞‘-áya-’を持つ使役が鼻音の接辞を持つ現在、つまり主題クラスVI現在のような他の使役形成

と共存しているのに対して、古代インド＝アリア語族の最後までに、‘-áya-’タイプは現在の体系の中で事実上使役の形成のみを残している⁴⁾。

4. 方法論：通時論の類型論的質問票

(類型論的にそれほど洗練されていない) 通時論的領域に接近する類型論者は、方法論的な問題に即座に直面するだろう。所与の言語あるいは言語系統／語族の歴史の中で類型論的に関与する特性をどのように獲得するか？ どのような種類の道具がその目的のために使われ得るか？

この分野では、共時論的な類型論において過去3、40年の間、発展してきたし、成功的に使用されてきた同じ強力な道具、つまり類型論的な質問票(questionnaire)が応用され得るようである。類型論的な質問票はレニングラード／サンクトペテルブルクの類型論グループの枠組みにおいて、特に使役、受動、再帰、相互等々のような結合価を変える範疇の共時論的研究のために幅広く使われる。(使役、受動、再帰、相互はこのグループの調査においていつも注目されてきたし、今も注目されている。) 読者は真っ先に V. P. Nedjalkov (1988, 2000, 2007), E. Š. Geniušienė (1987) そして V. S. Xrakovskij (1996, 2001, 2005) のようなこの学派の著名な代表者によって参照できる。

本稿⁵⁾において示された質問票は通時論的に方向づけられるものである。そのような方向づけがどのように達成され得るのか？ 一見すると、共時論的質問票をその通時論的質問票に変換するのは少し取るに足らない作業のようである。形式の各々の共時論的な問題を単純に定式化する必要がある。つまり、「何が歴史において所与の共時論的特性に起きているか？」ということである。も

4) 単独から複数へという反対の傾向(それは、おそらく通時論の類型論的分類という観点から異なる進化的なタイプを裏切るものであろう)を参照せよ。そのような例は古代エジプト語からコプト語までのエジプト語の動詞の進化のために証明されている。

5) 私はその質問票の最初のものについて所見と意見をくれた V. P. Nedjalkov に謝意を表す。

もちろん、全ての共時論的現象がその歴史、過去であれ、未来であれを持つ。しかし、機構的な置き換えはおそらく歴史的な文法から抽出された事実の単なる寄せ集めに過ぎないという結果になる。それは適切に幾つかの特性に集中し得るだろうし、他の特性を無視し得るだろう。明らかに、言語的体系の進化において基本的な流行を決定する最も重要な特性に焦点を合わせなければならない。以下、動詞の範疇（態と結合価の変化）のかなり同質のグループに集中する、試験的な質問票が示されるだろう。この質問票では、歴史言語学的証拠の類型化に最も関与的であるような問題点を拾い上げようとするものである。

5. 態と結合価を変える範疇の通時論の類型論的研究の ための予備的な質問票

大部分の質問は(i)（親縁関係の文書化された歴史を開け放つ最古の言語 L₀から出発する）共時論的な部分、それが立証された言語の研究のもとでその特性を提示するが、と(ii)（それが《D》で標示される）通時論的な部分を含む。幾つかの場合、(iii)研究のもとでの言語的現象の仮説的（再構され得る）起源についての質問を投じるのが適切である。この部分の質問は《R》で標示される。ほとんどの質問は歴史言語学的な研究、特に（古代）インド＝アーリア語族から取り込まれる例証的な資料で満たされる。Xは個々の態と結合価を変える範疇（使役、受動、再帰、相互等々）の包括的な術語である。例は◆の後に示される。

1. 結合価を変える範疇の標示の体系（Xs）

1.1. 主要な結合価を変える範疇がどのように表現されるか？

1) 適切な意味での態（狭義）

・受動

- ・反受動
- 2) 広義の態
 - ・再帰
 - ・相互
 - ・使役
 - ・反使役（脱使役）
 - ・適用語幹
 - ・受益者格（目的語の場合）
- 3) 態と関係する範疇
 - ・感情格（主語の場合）

Xの標示とそれらの関係を共時論的にそして通時論的に比較すること。

- ◆ スカンジナビア諸語（古典ノルウェー語，古典スウェーデン語，スウェーデン語等々）の歴史において，形式的なタイプの受動の間の機能的そして年代順の関係

Haugen (1982: 134, 159-161), Holm (1952) 等々

- ・ ‘-s (←-st←*-sk)’ の形態論的（中間）受動
 - ・（初期の現代スカンジナビア語まで）迂言的（分析的）な ‘vera-’ 受動
 - ・（主に10世紀と13世紀の間で）迂言的（分析的）な ‘verda-’ 受動
 - ・（13世紀以降）迂言的（分析的）な ‘bliva-’ 受動
-
- ◆ 古代－中期－現代高地ドイツ語の迂言的な（periphrastic）受動の2つの競合する形式（Kotin (1995)）。また，ゴート語の形態論的受動と迂言的受動の間の関係を参照せよ。
- Van der Wal (1981) を見よ。

	動的な受動	静的な受動	
		継続相	結果相
初期の古代高地ドイツ語（12世紀まで）	‘uuerdan-’ 受動	‘uuesan-’ 受動	
後期の中世高地ドイツ語（12／13世紀から16／17世紀まで）	‘werden-’ 受動	‘werden-’ 受動 ‘wesen/sin’ 受動	‘wesen/sin-’ 受動
現代高地ドイツ語	‘werden-’ 受動		‘sein-’ 受動

1. 1D. どのように標示の集合が通時論的に変化するか？ 新しい標示の勃興。

- ◆ 中期朝鮮語の統辞論的使役構文の出現と後の中期朝鮮語（例えば15世紀以後）のその生産性の増加（Song, Kwon（近刊書））【註：おそらく朝鮮語の分析的な使役 ‘I - 게 하다’ の通時論的考察があるものと思われる。インターネットで調査するも、まだ未刊行。】

1. 2. 標示の地位：自由形態素あるいは拘束形態素、文法化された/文法化されていない/完璧には文法化されていない。

1. 2D. この地位が歴史においてどのように変化するか。その推移《自由形態素→拘束形態素》が証明されるか。この推移の詳細（時代推移；そこでは、どの構文において/どの動詞によってこの拘束が証明されるか。）文法化の現象とそれらの詳細。

- ◆ スラブ語：再帰代名詞の発展（→接語→拘束形態素）
 共通スラブ語 ‘*se’ →ポーランド語の接語 ‘sie’/ロシア語の接尾辞 ‘-sja’ を参照せよ。

- ◆ ゲルマン語：再帰代名詞の発展（→接語→拘束形態素）
ゲルマン祖語 *sik' → 古代ノルウェー語 -sk'（→スウェーデン語 -s'）
- ◆ 初期ベーダ語→中期ベーダ語→後期（後期ベーダ語）サンスクリット語：
相互代名詞の文法化 'anyó...anyá-(anyò 'nyá-) (another...another)'（主題9
Dを見よ）

結合価の標示の脱文法化

- ◆ ベーダ語の中動屈折（‘中動 diathesis’）の自動化する機能の喪失 [Kulikov
(2006), Kulikov (2009)]

1.3. Xの（形態論的）標示の生産性（どの動詞が問題となる標示を持ち得るか。幾つかの主要なクラスの動詞か。幾つかの（些細な）クラスの動詞だけか？

1.3D. 生産性が歴史においてどのように変化するか。（増加する/減少する/維持する恒常体）

- ◆ サンスクリット語/古代インド=アーリヤ語の 'aya' 使役の生産性の増大 [Tieme (1929), Jamison (1983)]
- ◆ スラヴ語の 'i' 使役の生産性の減少 [Gołab (1968)]
- ◆ ゲルマン語の 'jan' 使役の生産性の減少 [García (2005: 48 以降)]
- ◆ 古典ヘブライ語の接頭辞化した、あるいは接中辞化した '-t-' 形成の喪失 [Gzella (近刊)]

異なる標示の生産性において増加／減少の間のどんな相互関係もないのか。

- ◆ 古代インド=アーリア語の使役と受動の並行的な拡大；主題9Dを見よ。

2. Xの標示の機能と多義性

2.1D/R. 標示の基本的な意味が歴史においてどのように変化するか。

- ◆ カリブ諸語のために再構された受動から逆行への態発展 [Gildea (1998: 218 以降)]
- ◆ (第1 現在の活用と接続活用においてのみの) 後期エジプト語の古代エジプト語の受動形態素 ‘-tw’ の再分析 [Reintges (近刊書)]
- ◆ ポーランド語の本来の受動, 非人称受動, そして ‘no/to-’ 分詞の主語の非人称使用の分化 [Wiemer (近刊書) を見よ]

2.2D. 語彙化の文書化された例とそれらの時代推移。主なタイプの語彙化

語彙化の例

- ◆ ロシア語の相互 ‘-sja’: ‘drat’ + ‘-sja’ (tear each other) → ‘hit each other, fight’
- ◆ ベーダ語の中動 diathesis (中動屈折):
‘šap (curse)’ + 中動 = ‘šápate (curses oneself)’ → ‘swears’
- ◆ ノガイ語 (トルコ語) の使役:
‘ojna- (to play)’ : ‘ojna-t- (make play)’ → ‘amuse (a child)’
第2 の使役: ‘ojna-t-tyr- (to let/allow to play)’ 【許容】 [Kulikov (1993: 134, 1999a)]

2.3R. Xの標示の勃興そして時代推移

- ◆ 受動と中動の形態素は多くのインド＝ヨーロッパ諸語におけるように (ロシア語の ‘-sja’, スウェーデン語の ‘-s’ 等を参照せよ。←印欧祖語の代名詞の語彙素 ‘*s(u)e (own, -self)’), 再帰代名詞に頻繁に立ち戻る (Haspelmath (1990), Heine, Kuteva (2002: 252 以降) を見よ)。
- ◆ 再帰の形態素の受動機能の発展は使役の再帰使用の段階を経由し得る (ロシア語の ‘-sja’ の意味論的進化というそのような筋書きの可能性について

て, Janke (1960: 24) を見よ)。

- ◆ 受動の形態素は動詞 ‘be’ (マプチェ語では, 受動接尾辞 ‘-nge’ ← コピュラ動詞 ‘ngen(be)’。Zúñiga (近刊) を見よ), ‘get’ (Haspelmath (1990: 41), Heine, Kuteva (2002: 145 以降) を見よ) そして幾つかの他のものに立ち戻る。
- ◆ オランダ語の再帰代名詞 ‘zich’ (期待される ‘**zik/zij’ の代わりに。中期オランダ語 ‘sik’ を参照せよ) がドイツ語 ‘sich’ から借用される。
- ◆ 使役形態素の典型的な出処は, 方向そして利益の接辞だけでなく, ‘make’, ‘let’, ‘give’ を意味する動詞も含む (Song (1990, 1996: 80-106), Heine, Kuteva (2002: 117 以降, 152))。
- ◆ 相互の標示は再帰の形態素に立ち戻る (Nedjalkov (2007), Heine, Kuteva (2002: 254) を見よ。ロシア語の ‘-sja’ を参照せよ)。
- ◆ ベーダ語の相互の標示 ‘vi’ (‘dvis(hate)’ - ‘vi-dvis-áte((they) hate each other)’ を参照せよ) と古典ギリシア語の接頭辞 ‘δι α-’ (‘δι α- λ ο γ ο ς(dialogue, conversation)’, ‘δι α- ε ι π ε ί ν(talk to each other)’, ‘δι α- κ υ ν ε ω(kiss each other)’ ← 印欧祖語 ‘*dvis (in two) 【合成語の ‘*dvi-’】’) を参照せよ) は数詞 ‘two’ から派生する (Lubotsky (1994: 202 以降), Kulikov (2002) を見よ)。
- ◆ トルコ語の相互接尾辞 ‘-ş-’ はトルコ祖語の複数の標示 ‘-š/-l-’ に語源的に関係する。

2.4. (結合価の変化に関係しない) どの他の意味/機能がXの標示によって表現されるか (例えば, 使役/反復, 使役/強意, 反使役/起動, 再帰/強調)。幾つかのこれらの機能の副次的な特性のためのどんな歴史的証拠があるのか。

- ◆ アラビア語 (‘darasa(learn)-darrasa(teach) 【使役】’, ‘qatala(kill)-qattala(massacre) 【反復】’ を参照せよ), ボウマー・フィジー語 (‘mate(die)-va’a.

-mate-a (kill) 【使役】’, ‘taro-ga (ask) -va’a. -taro-ga (ask many times) 【反復】’,
を参照せよ) そして幾つか他の言語の使役/反復の多義性 (Li (1991),
Kulikov (1999b, 2001a: 894) を見よ)。

2.4D. この多義性が L₁, L₂...に保存されているか。

どの新しいタイプの多義性が L₁, L₂...に現れるか。

2.5. Xの標示の元々の(結合価を変える)機能の喪失の例があるか。他の機能によって元々の機能が置換する例は、結合価を変えるものに関係しないが、存在するのか。

‘受動から能格への’発展の例:

- ◆ 古代インド=アーリア語(ペーダ語)→中期インド=アーリア語→新インド=アーリア語: 受動の完了分詞 ‘-ta/-na-’を持つ古代インド=アーリア語が新インド=アーリア語の能格構文を引き起こす(Bubenik (1993, 1998), Butt (2001), Peterson (1998) を見よ)。
- ◆ カリブ語族の(受動構文から)能格性の発展(Gildea (1998: 218以降)を見よ)

3. どのタイプの混合主義が結合価の標示のために証明されるか。

- ◆ (印欧祖語のために再構された) “中動態” (例えば, Neu (1968a, 1968b), Jankuhn (1969), Flobert (1975), Gonda (1979) を見よ。)

受動

反使役

再帰

相互

自動受益者格(主体版)

3D. これらタイプの混合主義がどのように通時論的に変化するか。

- ◆ 《中動態》：印欧祖語からベーダ語までの中動屈折の機能の発展。中動屈折で表現される機能は点で描いた線で囲まれている。

印欧祖語		ベーダ語
受動：		受動 ‘-yá’ 現在 + 中動, ‘i-’ アオリスト, 状態相
再帰：		再帰 ‘tamú, ātmán-’
相互：	→	相互 ‘ví’ + 中動., ‘mithás’
反使役：		反使役
自動受益者格：		自動受益者格 中動.

- ◆ ラテン語からロマンス語/フランス語まで ‘se :’ の中動機能の発展 (Kemmer (1993: 151-182), Cennamo (1993, 1998), Heidinger (近刊))。中動 ‘se’ とその再帰で表現される機能は点線で描かれた線を取り囲まれる。

ラテン語		現代ロマンス語 (フランス語等)
反使役		反使役
単純な自動		受動
再帰	→	再帰
相互		相互
受動		受動

- ◆ 幾つかの現代トルコ語(例えば, トゥバン語。古代トルコ語は例外である), ツングース諸語とモンゴル諸語そしてその出現の使役/受動の多義性 (例えば, 許容使役からの出現: ‘the boy let the dog bite.’ → ‘the boy let himself be bitten by the dog.’ → ‘the boy was bitten by the dog.’ (Nedjalkov I (1991) を見よ。))

4. (‘John opened the door. (他動詞 = 使役) / ‘The door opened. (自動)’ におけるように) 不安定な (自他同形の) 動詞/動詞の形式, 例えば動詞において何の形式的な変化がなく, 結合価の交替を示す動詞/形式があるか。

4D. この特性が言語の歴史においてどのように変化するのか。不安定なタイプの拡大の場合では (ゲルマン諸語そして特に英語の歴史を参照せよ), 何が不安定な様式の出処であるか。

◆ 英語における不安定な様式の勃興の幾つかの機構

- (i) 幾つかの音韻論的な発展によるもの (現代英語の ‘melt’ における古典英語の自動 ‘meltan’ と他動使役 ‘mieltan, myltan’ を参照せよ。)
- (ii) 幾つかの統辞論的過程によるもの。例えば, 多くの基本的に他動詞は, 古典英語において再帰代名詞 (‘hide/hide himself’ を参照せよ) を伴っても, 伴わなくても, 自動的にも使用されるが, 時期が下ると, 再帰標示を使わない傾向がより強くなる (Hermodsson (1952: 65 以降), Visser (1970: 145 以降))。

◆ ゲルマン諸語において, 幾つかの ‘-i-(-jan-)’ 使役の自動的な使用の出現の結果として不安定さが起こる (古典英語の ‘iernan(run)’, 古典高地ドイツ語 ‘rinnan(run 【自】)’ [＜印欧祖語 ‘*renna-(run)’] ~ 古典英語 ‘æranan (run 【自】, arrange running 【他】)’, 古典高地ドイツ語 ‘rennen(run together, run around 【自】, coagulate 【他】)’ [＜印欧祖語 ‘*rannija-(make run)’], それはゴート語のペア ‘rinnan(run)’, また ‘ur-rinnan(rise) ~ ur-ranjan(make rise (of the sun))’ と対立するが, そこでは, ‘-jan-’ 使役が自動的にまだ使用され得ない)。García García (2005: 49 以降, 80 以降) を見よ。

◆ ギリシア語において不安定な様式の幾つかの機構 (Lavida (近刊))

‘使役の拡張’ = 元来自動詞であるものが使役他動の使用へと勃興する。

‘leukaino (whiten, make white)’を参照せよ。つまりそれは古典ギリシア語の自動の能動と自動の非能動→ヘレニズムのロマン語の自動の非能動と不安定な自動という変遷をたどる。‘pleo(float, sail, make sail)’を参照せよ。つまりそれはホメロスのギリシア語の自動の能動→古典ギリシア語の不安定な能動という変遷をたどる。

- ◆ 東レズギ語の不安定な様式が勃興する幾つかの機構 (Ganenkova (近刊))
変形を示す他動詞は動作主によって引き起こされない、自発的な変形を表現し始める (タバサラン語 ‘at’ub (hit, strike 【他】)’～レズギ語 ‘at’ub (cut, be cut)’を参照せよ)。

4R. どの動詞クラスが不安定な様式に参与するか。どの動詞クラスのために、不安定な様式が先に/後に証明されるか。近縁関係のある諸語 (L₁, L₂...等) が、不安定な様式に関わる動詞のクラスの体系に関する限り、どのように異なるか。どの言語が祖語 (L₀) のために再構された元々の体系に最も近いのか。

- ◆ ゲルマン諸語の浮動動詞のクラスの間の相違 (Abraham (1997) を見よ。)
- ◆ 英語の歴史における浮動動詞の (意味論的) クラス (Kitazume (1996) を見よ。)

不安定なタイプの衰退の可能な筋書き

- ◆ 初期のベータ語→中期のベータ語 (初期のベータ語の最後までにベータ語の不安定な完了の喪失) (Kulikov (2003) を見よ。)

5. 結合価を変える範疇のどの組合せが可能か。

(例えば、使役の受動が可能か/証明されるか。使役の再帰が可能か/証明されるか。相互の受動が可能か/証明されるか。)

5D. そのような組み合わせた範疇の出現が歴史の周期の中で文書化されているか。

◆ 初期のベータ語から中期のベータ語まで：使役の受動

—— 初期のベータ語では、接尾辞 ‘-yá-’ によって現在の受動が単純な他動から派生するだけである。

—— 中期のベータ語（若い真言、ヤジュールベータ、ブラーフマナ）では、自動詞の願望動詞と使役から派生した ‘-yá-’ 受動の最初の例が証明される。例えば、‘ā-pyāyāmāna- (being made swell) 【‘pyā (swell)’ VS +】’, ‘pra-vartyāmāna- (being rolled forward) 【‘vṛt (turn)’ MS^m】’ そして ‘sādyāte (is (being) seated, set) 【‘sad (sit)’ YV^m】’ がある。

——（スラウタ経典以前から）ベータ語の最後の時期そしてベータ語の後に、他動の使役から派生した受動が証明される。例えば、使役 ‘dhāpáyati (make put)’ - ‘ni-dhāpyamāna- VaitS’, 使役 ‘pāyáyati (make drink)’ - ‘pāyyamāna- ĀŚpS +’ 等がある（Kulikov (2001b : 522 以降), Kulikov (2006 : 76 以降)）。

6. 二重の範疇（二重の使役、二重の受動等）

6.1. 二重のXが可能か。（X = 使役、受動、再帰等）

それらはどのように使用されるか。それらの意味は何か。

6.1D. 二重のXがどのように起こるか。その使用が歴史においてどのように変化するか。

◆ 中期インド＝アーリア語の二重使役が最高に特化された古典インド＝アーリア語 ‘-(ā)payā-’ 使役から出現すること。

6.2. 疑似の二重,あるいは3/2の範疇: 2つの形態素に対して1つの意味が割り当てられる。

◆ トルコ語の疑似の二重使役 (‘3/2 使役’)

以下を参照せよ。

トルコ語 ‘kon-(settle) 【元々使役の意味】’ - ‘kon-dur-,kon-dur-t-(make settle)

【使役+使役】’

アゼルバイジャン語 ‘iç-(drink)’ - ‘(iç-ir-)/iç-ir-t(give to drink)’

カライム語 ‘ak-(flow)’ - ‘aγ-üz-/aγ-üz-dür-(cause to flow)’

二重の使役は(より古典的な/非生産的な)単純な使役を頻繁に追い出し得る (Kulikov (1993: 126-127, 1999a: 55-56) を見よ)。

◆ ヒットイト語の ‘3/2 使役’ の勃興 (‘harnink-mi’ というタイプと重複した使役 ‘ašēš-hhi’)。Daues (近刊) を見よ。

◆ バルカル語 (トルコ語) の二重受動は意志的な (計画的な) 活動を提供し得, その動作は (単純な受動によって表現される) 偶然の出来事と対立する。例としては,

‘bil-in-il-gen-di([the truth] was discovered [as a result of somebody’s inquiry].)’ ~ ‘bil-in-Nen-di([the truth] was discovered [accidentally].)’ がある。

7. 形態論的 X の語形変化表の特性

7.1. X が完璧な語形変化表を形成するか。

7.1D. X の語形変化表の特性が文書化された歴史の中でどのように変化するか。

- ◆ 接尾辞 ‘-yá-’ によるベータ語の現在の受動：初期のベータ語から中期のベータ語まで (Kulikov (2001b, 2006))

初期のベータ語の受動：ほとんど排他的に3人称単数、3人称複数そして分詞

リグベータにおいて証明される現在の受動形式の目録を参照せよ。本来の現在の形式に隣接して、分詞と希有な命令法、他の時制＝法の例外的な認証だけが見出させられる（不完了の出現、命令の出現、主観の出現、願望法の非認証）。完璧な語形変化表が中期のベータ語の時期に発展する。

7.2. 定でないどの構成がX（副動詞、不定詞、分詞、名詞化）にとって可能か。

7.2D. Xに基づく不定のどの形成が文書化された歴史の中で現れるか。

- ◆ 古代インド＝アーリア語：副動詞の使役が後期サンスクリット語以降、現れるだけである。
- ◆ スラブ語：（接尾辞/接辞 ‘se, -sja’ 等による）再帰動詞は名詞化を必ずしも典型的に形作るとは限らないが、ポーランド語は ‘sie-’ 名詞化を発展させている。

8. Xの標示が動詞でない語基（名詞、形容詞等）と組み合わせるのか。

8D. そのような派生がどのように出現するのか。

- ◆ ベータ語：相互標示 (RM) ‘anyonyam (文字通り another-another)’ が中期ベータ語の時期に代名詞として完璧に文法化しているが、それはもっぱら後期ベータ語の時期以降、（複合語の最初の構成員＝相互の接頭辞として）名詞に適応される (9.1Dを見よ)。

9. 統辞論：X構文の主な特性

- 9.1. ●受動構文の統辞論（受動の動作主が表現され得るか。それはどのようにコード化されるか。どの目的語が受動の主語に昇格され得るか等々）
- 使役構文の統辞論（被使役者（＝原因理由の目的語）が表現され得るか。それがどのようにコード化されるか。最初の目的語がどのようにコード化されるか。）

- 再帰の統辞論（再帰代名詞とその先行詞との一致等々）
- 相互の統辞論（相互代名詞とその先行詞との一致等々。相互の状況の関与者がどのようにコード化されるか。英語では、名詞＋名詞，名詞＋道具/共同を表すもの）

9.1D. これらの統辞論的特徴が歴史においてどのように変化するか。

受動の統辞論：

- ◆ トルコ語の受動：動作主なしの受動→明確に表現された動作主の名詞を持つ受動，法を参照せよ。（ヨーロッパ諸語の影響の下でおそらく導入されたであろう）後置詞 ‘*tarafından*’ によるトルコ語の受動。
- ◆ （南）スラブ語の受動動作主のコード化
古典スロバキア語，古典セルビア＝クロアチア語：具格→現代スロバキア語，セルビア＝クロアチア語：（格の混合主義，特に複数の格におそらくよる）奪格の前置詞 ‘*ad*’ を持つ前置詞句（Gvozdanović（1996）を見よ）。
- ◆ （古典）ロシア語の受動動作主のコード化：
受動動作主の道具の格標示は古典教会スラブ語からの古典ロシア語の文語によっておそらく借用されてきたし，古典ロシア語において受動動作主のコード化の2つの他のタイプ（‘*ot* ь’＋属格と‘*u*’＋属格）とおそらく共存しているし，その後，完全にそれらを衰退させている（Janke（1960：63以降）を見よ）。
- ◆ ポーランド語の無人称受動構文：（古典ポーランド語において使われる）

明確に表現された受動動作主の消失（Wiemer（近刊）を見よ）。

使役の統辞論：

◆ スペイン語の代名詞的被使役者のコード化：

古典スペイン語：与格 ‘le/les’ → 現代スペイン語：対格 ‘lo/la/los/las’ (Davies (1995))

◆ 古代朝鮮語と初期の中期朝鮮語の被使役者のコード化（最も頻繁に対格）が意味論的には動機づけられないし、現代朝鮮語において被使役者のコード化（与格/対格）が意味論的に動機づけられることが起こる（Song, Kwon（近刊））

相互構文の統辞論：

◆ 初期ベータ語→中期ベータ語→サンスクリット語（後期ベータ語）：

相互代名詞を持つ構文の変化 ‘anyá…anyá-/anyonyá- (other-other)’ (Kulikov (2007) を見よ。)

◆ 段階Ⅰ（初期ベータ語）

RM1：NOM S：GEN. non-SG RM2：ACC V：SG

（未来の）相互代名詞 ‘anyá- anyá-’ の2つの構成要素（RM1, RM2）は（独立した強勢を伴いつつ、他の単語によって分けることができる）自律的な語彙単位として振舞い、先行詞の名詞と数、性において一致する。動詞の形式は相互の句の最初の（単数の）構成要素と数において一致し、それ故それは通常単数である。

◆ 段階Ⅱ（初期ベータ語の最後）

S：NOM.non-SG RM1：NOM. SG/PL. M/F-RM2：ACC. SG/PL. M/F V：non-SG

相互代名詞の構成要素はいまだに自律的であるが、動詞の形式は（互いに相互関係にある関与者の集合を示す）全体の相互複合体と一致し、それ故

それは単数ではない。

◆ 段階Ⅲ（中期～後期ベータ語）

S : NOM. non-SG RM1 : NOM. SG/M/(F)-RM2 : ACC. SG. M/F V : non-SG
相互代名詞の構成要素は分離することができない。単数の形式は一般化される。相互代名詞は必ずしもいつも性（男性／中性／女性）において先行詞の名詞に一致するとは限らない。

Ⅲ a （ベータ-ブラーフマナにおいて）：相互代名詞のどちらの部分も先行詞の名詞と性において一致する（*anya*-[M/N/F] *anya*-[M/N/F]）。

Ⅲ b （最も多くの他の中期ベータ語のテキストと後期ベータ語のテキスト）：相互代名詞の2番目の部分だけが先行詞の名詞と性において一致する（*anyá*-(M) *anyá*-[M/N/F]）。

◆ 段階Ⅳ（後期ベータ語～サンスクリット語（後のベータ語））

S : NOM. PL RM1 : NOM. SG. M-RM2 : ACC. SG. M

‘*anyonya*-’は単独の語彙単位として固定化しているし、先行詞の名詞と一致しない。それは複合語の最初の構成員としてまた現れる（‘*anyonya-sakta*-(connected with each other)’を参照せよ。

9.2. 構文（また、動詞の統辞論的タイプ）のどのタイプがXのために基本構文（基本動詞）として役立ち得るか。

9.2D. Xの派生の適用の範囲が歴史においてどのように変化するか。

◆ 初期/中期ベータ語の使役と受動の適応の範囲：

初期のベータ語では、‘*-āya-*’使役は感覚と消費の幾つかの動詞だけでなく（‘*drś*(see)’, ‘*vid*(know)’, ‘*pā*(drink)’），自動からももっぱら形成される。それらの使役は対格あるいは幾つか他の斜格（処格、属格等々）によって構築され得る。Jamison (1983) の術語における ‘自動/他動’。（類型論的一般化については、Nedjalkov, Sil’nickij (1969) をまた見よ。）

他動の使役は中期ベータ語（ブラーフマナ）において最初に出現する：
例えば ‘kr(make)’ - ‘kāráyati(cause to make)’, ‘vac(speak)’ - ‘vācáuati(make
speak)’, ‘hr(take, carry)’ - ‘hāráyati(make take, make carry)’がある。
(Thieme (1929), Jamison (1983: 186 以降), Hock (1981: 15 以降) を見よ。)

初期のベータ語では, ‘-yá-’ 受動は単純な他動から派生するだけである。
中期ベータ語のテキストは派生した他動, すなわち使役からできた ‘-yá’
受動の最初の例を証明する (5D を見よ)。どちらの発展も時代的に並行し
ている (Kulikov (2006) を見よ)。

* * * *

先に示した質問票は包括的であると主張しているわけでは決してないし, 新
しい質問と実例となる材料を容易に追加することができる。この質問票に関す
る全ての提案, 批判そして意見は大変ありがたいものである。

参 考 文 献

ここでは, 紙幅の都合から参考文献の翻訳は省略することにする。ただし,
この参考文献の中で特に印象に残ったものとしては, 中期朝鮮語の分析的な形
による使役に関するものを取り上げたい。それは近日中に出る論文集に掲載さ
れている論文である (Song, Kwon (forthcoming) Causative derivation in Old
Korean and Early Middle Korean: Korean voices embodied in Chinesemedium
texts, In S. Kittilä and Kulikov, L. (eds) (forthcoming) *Diachronic typology of voice
and valency-changing categories*, Amsterdam: Benjamins)。それが出版されるや
いなや, 購入し, それを熟読する必要がある。更には, 古代朝鮮語から現代朝
鮮語に至るヴォイスの通時論的变化も確認する必要があるように思われる。)

翻 訳 者 か ら

本論文は Nedyalkov 先生（1928-2009）の追悼論文に掲載されている。著者は Leonid Kulikov 先生であり、論文それ自体は英語で書かれたものである。本翻訳はそれを日本語にしたものである。この論文に提示されている全ての例を提示できなかった点、参考文献を翻訳できなかった点は全て翻訳者の実力不足である。

さて、言語類型論というと、数多くの言語に精通した研究者のみが研究することができるという暗黙の了解があるように思える。このような考え方をしっかりと実践しているのは、ロシアのペテルブルク学派であり、その創始者は Xolodovič 先生である。文法範疇、特にヴォイスの研究において、Xolodovič 先生の研究以降、盛んに使われている理論が *diathesis* の理論であり、その理論の最新のものを紹介しているのが Leonid Kulikov 先生である（2013 年出版の *The Oxford Handbook of Linguistic Typology* を参照せよ）。

一見すると、共時論的研究と通時論的研究は相容れない領域のように思えるが、実はそうではないという事実を再認識した次第である。

[附記] 本翻訳は、2013 年度松山大学特別研究助成による研究成果の一部である。